

日本旧石器学会

ニュースレター 第58号

NEWS LETTER No. 58

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



## 道北宗谷海峡周辺域の旧石器

夏木 大吾

はじめに

宗谷岬は北海道稚内市の東側に位置し、北海道本島最北端の岬である。宗谷岬からロシア連邦サハリン州の最南端クリリオン岬までの距離は約43kmであり、その間には水深50m程度の浅い宗谷海峡（ラ・ペルーズ海峡）を挟む。晴れた日には宗谷岬よりサハリン島南端を視認できる。旧石器時代の北海道はサハリン、南千島列島を含み、現在のアムール川河口域とつながっており、古サハリンー北海道ー千島（PSHK）半島の一部であった。サハリン南部では、ソコル遺跡の札滑型細石刃核と峠下型細石刃核を含む石器群、オリンピヤ5遺跡の広郷型細石刃核や大形石刃に特徴づけられる石器群、アゴンキ5遺跡の小形舟底形石器を含む石器群や有茎尖頭器など、北海道の後期旧石器時代後半期に共通する石器群の存在が知ら

れている（木村1997；ワシレフスキー2006）。

宗谷海峡周辺の旧石器時代資料は、日本最北端の稚内および、その西側に位置する利尻島、礼文島においても発見されている。稚内とこれら島々の間には、現在、利尻水道や礼文水道を挟むが、それらの水深は浅く、海水面が現在より約80m以上低い時期には陸続きであったため、旧石器時代の人や動物の往来が想定される。この地域の旧石器時代資料は、サハリンを介した大陸方面との先史時代文化の繋がりを知るうえで重要であるが、そのほとんどは1980年前半以前に報告され、遺跡や資料の詳細が不明なものを多く含むため、研究でとりあげられることが少なかった。近年、筆者が道北の調査研究を行ってきた中で、それらの一部について新たな知見を得たので、ここで紹介しておきたい。



左：道北宗谷海峡周辺域の旧石器時代遺跡 右：海拔-125mの北海道  
(地図は産総研「地質図Navi」<https://gbank.gsj.jp/geonavi/>より)

### 稚内市

豊別遺跡群とタツニウシュナイ遺跡などが知られている（右代1999；新岡・佐藤1977）。豊別遺跡群は昭和47年頃からの稚内営林署による国有林の造林事業の際に発見された遺跡で、札滑型細石刃核、細石刃、搔器、彫器、削器などが採集されている。豊別遺跡群は、宗谷（東部）丘陵の標高80～100m沢沿いに点在し、第1地点から第12地点までが登録されている。主要な遺物のほとんどの所在はわからないままだが、多くの細石刃が稚内市北方記念館に展示されている。この他に、宗谷岬の先端を流れる珊内川周辺の丘陵部で有茎尖頭器、石刃が採集されているが、現在の行方はわかっていない。

### 利尻富士町

利尻島では利尻富士町（旧東利尻町）から採集された黒曜石製細石刃3点と頁岩製の荒屋型彫器（左斜刃形彫器）1点がある。資料は未見であるが、実測図における細石刃の形態から峠下型細石刃核を含む石器群と推察される。採集された場所は、利尻島北部の利尻富士町鴛泊を北流するノボリオマナイ川の西岸に位置し、「栄町キャンプ場遺跡」（東利尻町教育委員会1978）との名で掲載されている。最近、利尻富士町教育委員会が過去の調査記録に基づいて遺跡の位置を検討した結果、実際の場所はキャンプ場ではなく、その北東に隣接する「利尻神社下遺跡」であったと推定されるに至った。利尻神社下遺跡は、利尻富士町が所有する林の中にあり、利尻富士町教育委員

会が町内における旧石器時代の解明を目的として2022年から発掘調査を行っている。筆者は、東京大学の福田正宏とともに、2023～2024年度の調査に参加してきた。2023年の調査ではロームの混じる層から両面調整石器が出土し、旧石器時代の石器が出土したと新聞で報じられた。しかし、その範囲を拡張して行った翌2024年度調査では、石器集中部の広がりが見えられたものの、それらには縄文時代早期並行の土器が伴うことが明らかになった。確実に旧石器時代に帰属する石器が出土していないことから、2023年度調査で出土した両面調整石器等もこの縄文時代早期並行に属する可能性が高い。

### 礼文町

知床尺忍小学校裏遺跡が旧石器資料の出土した遺跡として掲載されている。この遺跡は礼文島南端の香深村シレットコマナイに位置し、シレットコマナイ川左岸に立地する。旧石器時代の資料は、1982年の北海道教育委員会の分布調査において、旧尺忍小学校西側の畑地から採集された。尺忍小学校はすでに閉校となっているが、建物は残っており、採集された場所はおおよそ推定されている。採集された石器には縄文時代のもも含まれるが、確実に旧石器時代と判断される黒曜石製石器4点（細石刃3点、剥片1点）がある。剥片の背面には、細石刃剥離作業面と、両面加工のある縁辺を取り込んだ細石刃核下縁部が観察され、札滑型細石刃核から剥離されたと考えられる。細石刃3点も札滑型細石刃核から剥離されるものに



左：礼文町知床尺忍小学校裏遺跡 右：礼文町香深村未掲載地より採集された石器（筆者撮影）

類似する。

知床尺忍小学校裏遺跡から東に約400m離れた未登載地の海岸段丘においても旧石器時代の石器が採集されている。この場所は、北のカナリアパーク（映画「北のカナリアたち」の記念公園）から数百m南に位置し、現在は原野となっているが、かつては畑地だったようである。旧石器と考えられる石器は黒曜石製の細石刃核1点、細石刃1点、石刃2点である。細石刃核は技術形態とサイズの観点から忍路子型細石刃核2類に分類できるが、通常の例に比べると作業面が大きく左側面側に傾いている。細石刃は長さ4.5cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm程度の完形品である。忍路子型細石刃核2類の例よりもサイズが大きいが、札滑型細石刃核の例よりは小さく、それら以外の型式の細石刃核から剥離された可能性が高い。

おわりに

稚内、利尻島、礼文島では、資料は零細ながら旧石器時代遺跡が各所に分布する。石器石材は主に白滝などの道東産と思われる黒曜石であり、250～300kmも離れた遠隔地石材である。また、これら全ての地域で新第三紀の硬質頁岩が

採取可能であり、石器石材産地としても先史狩猟採集民にとって訪れるメリットがあった。新資料には恵まれないが、未だ多くの旧石器時代遺跡が地中に埋もれているのではないかと期待される。

資料や現地の見学、情報提供等において、下記の諸氏、諸機関（以下、敬称略）よりご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

齊藤譲一、高橋鵬成、藤沢隆史、山谷文人、利尻富士町教育委員会、礼文町教育委員会、稚内市教育委員会

引用文献

- 右代啓視1999「先史文化の時代」『稚内市史第二巻』pp.63-106、第一法規出版：札幌
- 木村英明1997『シベリアの旧石器文化』、北海道大学図書刊行会：札幌
- 新岡武彦・佐藤和利1977「稚内市豊別遺跡群予報」『北海道考古学』13、pp.91-94
- 東利尻町教育委員会1978『埋蔵文化財調査報告書－旧石器遺跡』
- ワシレフスキー,A.A.「サハリンと日本の旧石器文化」『考古学ジャーナル』540、pp.19-24、ニューサイエンス社：東京

## 2023年度日本旧石器学会賞受賞者報告

ニュースレター57号で報告しました通り、2023年度学会賞を佐久間光平会員（前 宮城県教育委員会）、2023年度論文賞を山田哲会員（北見市教育委員会）が受賞されました。「日本旧石器学会賞選考委員会による選考理由」および「受賞者の言葉」を報告いたします。

2023年度学会賞

佐久間 光平 会員（前 宮城県教育委員会）

選考理由

学会賞は、旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員に授与する。学会員からの推薦に基づき、当委員会は佐久間光平会員を2023年度の学会賞受賞候補者として選考した。

佐久間会員は、2001年に発覚した旧石器遺跡捏造問題により、宮城県内のすべての前・中期旧石器時代遺跡の登録抹消・時期変更がなされ、その影響が後期旧石器時代遺跡にも波及するなか、

2007年からは宮城旧石器研究会を主宰し、問題発覚後の宮城県内の旧石器研究を牽引してきた。その諸活動においては、葉菜原No.20遺跡、葉菜山No.8遺跡・No.17・No.34遺跡の再整理報告がおこなわれ、2018年には県内旧石器時代遺跡を集成した資料集『宮城の旧石器時代遺跡』も刊行された。若手研究者とともにおこなわれたその地道な作業は、旧石器遺跡捏造問題により一旦は不透明となった宮城県の旧石器時代の様相の再構築をおこなう上で大きな推進力となるものであり、高く評価することができる。

一方、個人の研究では、東北地方では比較的出土例の少ない細石刃石器群の研究を長年にわたり進めており、『旧石器研究』12号（2016）に掲載された論文「東北地方の尖頭器石器群・細石刃石器群の展開について」では、東北地方の当該石器群を北海道との関連から論じるなど、より広域的な視点でも地域の石器群を捉えている。これら一連の研究活動は、地域資料の価値を高めると

もに、若手研究者の育成にも寄与するものとなっており、研究者として模範となるものである。

以上のことから、佐久間会員の一連の研究活動は、日本旧石器学会の発展に大きく寄与しており、学会賞を受賞するに相応しいと考える。

(日本旧石器学会賞選考委員会委員長 渡辺丈彦)

#### 受賞の言葉 佐久間 光平 会員

この度は、2023年度学会賞を賜り、学会の皆様には心より感謝申し上げます。

選考理由にあげていただいた「宮城旧石器研究会」の活動は、今年で18年目になります。2000年発覚の「旧石器ねつ造問題」によって宮城県はかなり深刻な状況に陥りましたが、検証作業に一段落ついた段階で、県内の有志が集まって2006年に当研究会を立ち上げました。原点に立ち返った地道な活動を研究会の方針に据え、県内旧石器資料の見直しや勉強会を続けることにしました。研究会活動を進めていく中で、県北西部にある薬菜山周辺の発掘資料がほぼ未報告のまま残されており、中には台形石器を伴う石器群（薬菜山No.17）や北方系細石刃石器群と神子柴系石器群の特徴を持つ石器群（薬菜山No.34）など、重要な



佐久間 光平 会員

資料が含まれていることを知りました。そこで、研究会ではこれらの資料を『宮城考古学』誌上で継続的に報告し、また、県内の旧石器遺跡の総括的な集成集『宮城の旧石器時代遺跡』を取り纏めました。若手の仲間と一緒に取り組んだこうした一連の活動を、今回、学会賞という形で評価いただき、大変光栄に思っております。

北海道・東北地方の細石刃文化研究に関しては、学部生の時から長年、関心を持って取り組んできました。3年生の時の面談で恩師の芹沢先生から「君は卒論で何をやりたいのか」と問われ、「旧石器時代終末から縄文時代初め頃の時期に興味があります」とお答えしたところ、「北大の吉崎君がいい資料を持っているはずだから札幌に行って来なさい」とのこと。それで、吉崎先生から「祝梅上層遺跡」（細石刃石器群）の資料をお借りして卒論をまとめた、というのがそもそものきっかけでした。それ以来、北海道や東北地方の細石刃文化研究に拘っていますが、受賞を励みにさらに研究を続けなければと思っております。

最後になりますが、この度の受賞につきまして、改めて深く感謝と御礼を申し上げます。

#### 2023年度論文賞

山田 哲 会員（北見市教育委員会）

#### 選考理由

論文賞は、会誌『旧石器研究』に優れた業績を発表した会員に授与する。当会員は山田哲会員を2023年度の論文賞受賞候補者として選考した。

山田哲会員は、『旧石器研究』18号（2022）に「日本列島における細石刃石器群の成立—特に稜柱系細石刃石器群の生成と特性について—」を発表した。山田会員のこれまでの研究は、学位請求論文を基にした『北海道における細石刃石器群の研究』（2006）にも端的に示されるように、北海道における細石刃石器群を丹念に集成、類型化、編年作業をし、それを基礎に石器群間にみられる変異性を「居住・移動システム」の差として理解しようとするものであった。一方、受賞対象となった本論文は、まず文化伝播の用語・概念の整理をおこない、つぎに東北アジア大陸に出現した細石刃石器群が、地域石材環境への適応を強めながら北海道に個性豊かに展開する様相を改めて示し、さらに北海道に遅れて本州島に展開する

「稜柱・舟底系細石刃石器群」との関係性を、やはり地域石材環境などを加味しながら総合的に説明しようとするものである。一地域のみではなく、日本列島全体を俯瞰した細石刃石器群の定着過程の解明は、学会全体の大きな関心事の一つであり、今回の論文は北海道を起点としたものではあるが、多様な視点からその一端に迫ろうとするものであり、その学術的意義は大きい。

山田会員も論文中の要旨で記すとおり、論文の内容は、これまで精緻に進めてきた研究をより広域に拡大する上での、あくまで「仮説的な素描」ではあるが、今後のさらなる展開が期待される。したがって山田会員の論文は、論文賞に相応しいものとする。

(日本旧石器学会賞選考委員会委員長 渡辺丈彦)

#### 受賞の言葉 山田 哲 会員

この度は、2023年度日本旧石器学会論文賞を授与いただきましたことに深く感謝申し上げます。

受賞論文の「日本列島域における細石刃石器群の成立—特に稜柱系細石刃石器群の生成と特性について—」(2022)は、北海道オホーツク地域に暮らす私が、地元の黒曜石や細石刃石器群を見

ながら、はるか西と南を眺めて考えていたことを整理してまとめたものです。

細石刃石器群を含めた旧石器の研究において、北海道では1980年代から2000年代にかけての発掘調査で量的にも質的にも優れた成果が次々と蓄積し、現在は、それをいかに活用して研究を発展させるかという時期になっていますが、今回の論文作成の過程で、日本においては広く他の地域でも概ね同じような状況にあることを実感することができました。北海道にしる大陸にしる、広大な地域に及ぶ細石刃石器群の基本的な変遷とその背後にあるものにはいまだにわからないことや制約が多く、古本州島との関係も一筋縄ではいかないのですが、その解決には、ミクロで精密な分析の追求と多くの情報を統合して全体を叙述するマクロな大局観の錬成のいずれもが必要と考えられます。

この論文は、そうしたことを意識して描いた、日本列島域における細石刃石器群成立の全体像について考える粗いスケッチのようなものであり、課題も内包しておりますが、各地の埋蔵文化財の調査や保護に日々携わってこられた方々による資料の蓄積と研究の進展に支えられていることは確かです。そこから多くを学びました。こうした方々に、改めて心からの感謝と敬意を表したいと思います。

#### 資源環境と人類 2024 シンポジウム ・普及講演会のお知らせ

2025年1月25日(土)・26日(日)に明治大学(駿河台キャンパス)において、資源環境と人類2024シンポジウムが開催されます。26日には日本旧石器学会の普及講演会(共催)として、小野昭会員が特別講演「黒曜石研究のこれまでとこれから」を行います。

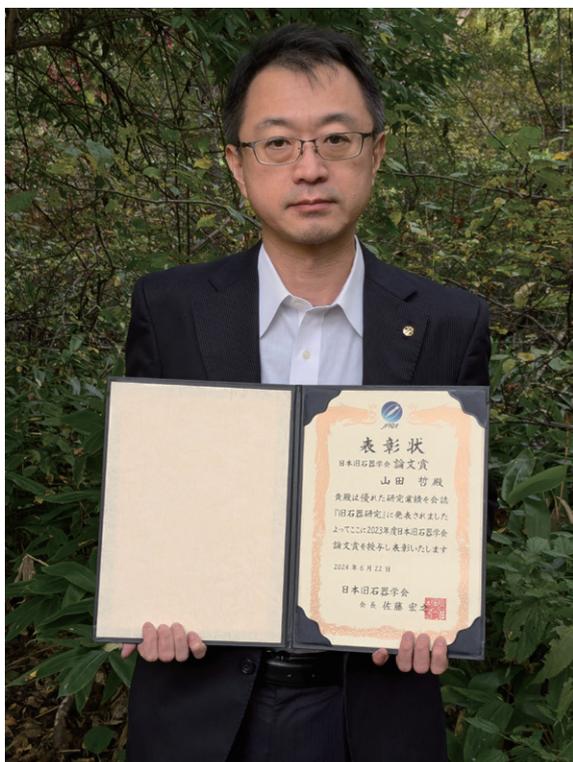
#### 資源環境と人類2024シンポジウム

『黒曜石研究の射程—その拡張に向けて—』

日時：2025年1月25日(土) 10:30~16:50

1月26日(日) 10:00~16:40

会場：明治大学駿河台キャンパス・グローバル  
フロント 4021教室・グローバルホール



山田 哲 会員



## 日本旧石器学会研究グループの募集

日本旧石器学会では、旧石器考古学またはこれに関連する研究課題について国内・国外の情報を交換し、研究することを目的として、研究グループを設置しています。「日本旧石器学会研究グループ規定」には自由に研究を行うことができ、運営費を補助することが盛り込まれています。

つきましては2025年度の日本旧石器学会研究グループを募集します。研究グループの発足を希望する会員は、グループ名、代表者名、連絡先、研究目的、活動予定期間、参加者数、運営費交付希望の有無などを記入して本学会事務局に応募してください。募集期間は2025年3月31日（月）まで。応募・問い合わせ先は、日本旧石器学会事務局へ電子メールまたは郵送でお願いします。

応募先・照会先：日本旧石器学会事務局  
（担当：鹿又喜隆・長崎潤一・尾田識好）  
〒206-0033 東京都多摩市落合1-14-2  
東京都埋蔵文化財センター調査研究部  
尾田識好方  
E-mail: jimmu@palaeolithic.jp

## お知らせ

### 日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード (<http://palaeolithic.jp/join.htm>) し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたり、論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

### メーリングリストへの登録

日本旧石器学会ではメーリングリストを活用しております。学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場としても活用するために設けたものです。また、今後はニュースレターのPDF配布等にも利用されます。そのため、2024

年6月の総会により、入会時に届出いただいているメールアドレスをメーリングリストに登録させていただくこととなりました。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

登録メールアドレスの変更を希望される方は、下記の事務局メールアドレスまでご連絡ください。

E-mail: jimmu@palaeolithic.jp

### 会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されています。会費は原則前納制としております。会費は6,000円です。会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、2024年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせ、納入をお願いいたします。

また、転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

### 振込先

日本旧石器学会  
郵便振替番号 00180-8-408055  
全国の郵便局で手続きいただけます。

日本旧石器学会ニュースレター 第58号

2024年12月23日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会  
仲田大人・夏木大吾・上峯篤史

発行：日本旧石器学会

事務局: 〒162-8644

東京都多摩市落合1-14-2

東京都埋蔵文化財センター調査研究部

E-mail jimmu@palaeolithic.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>